

ご遺族からの依頼書とご亡くなった方の生前の写真だけが頼りです。「闘病生活でやつれたほおをふくらませてほしい」「事故で陥没した顔を復元してほしい」。直接は会うことのないご遺族の思いが、伝わってきます。

ご遺体を修復したり、防腐処置したりして生前の元気があったころの状態に近づける技術をエンバミングと言います。専門的な知識を持った人をエンバマーと呼びます。

語りかけながら

そのエンバマーになって3年。これまでに10000人以上にお会いしました。病院の手術室のような場所約3時間。1対1で向き合います。

ガウンにマスク、ゴーグル、ゴム手袋などを身につけ、ご遺体を消毒し、防腐用の薬液を注入します。皮膚に腫らみを出したり、傷を埋め合わせたりすることもあります。

当然、心臓は止まっています。損傷が激しい場合もあります。でも人格を持った尊い人であることには、なんら変わ

エンバマー 橋詰 知子さん 39

りがない。「しんどかったね」。白なウエディングドレスもあ語りかけていることもよくありました。

最後は希望された衣装をお着せして化粧をします。真っ

尊いお別れ

穏やかな顔で

願いかなえたい

公益社（大阪市）でご遺体

を清める湯灌をしていました。その時のみなさんのため息が耳に残りました。「こんなにやせさせてしまった」「顔を見てお別れができない」。自分を責めたり後悔したり。ご遺族の要望をかなえたいと思うようになり、2003年、同社が開設したエンバマーの養成学校に入學しました。

ゆっくりとお別れするためのお手伝いをする仕事だと、誇りと自信を持っていました。が、友達に仕事のことを話すとき、驚かれ、哀れむようなことも言われました。

とてもショックでしたが、私自身、親にも仕事内容を伝えられずにいました。まだ世の中に認知されていない。自分の心の中に、胸を張れない気持ちで潜んでいたのです。

母の理解迷いなし
母には反対されるかと不安でしたが、このままでは本当のエンバマーにはなれないと思い、卒業間近のある日、打ち明けました。

母は黙って聞いてくれた後、「頑張れ」と励ましてくれました。娘が選んだ仕事を理解してくれたんでしょう。認められたと思えました。もう迷いはありません。家族も応援してくれました。

エンバミングに抵抗を感じる方もいます。しかし、お別れの時、やせ細ってしまった顔を見てもらうことは、亡くなった方も恥ずかしいのではないかと、尊敬にかかわるのではないかと、思うのです。生前とあまりにかけ離れてしまった顔に、棺桶のふたを開けることができなかつた、という話を聞きます。

いろいろなお別れの仕方があったり。ただ、目を閉じた時に浮かぶ顔は穏やかであつてほしい、と願います。



処置室で器材の点検をする橋詰さん（大阪市北区のエンバミングセンターで）

エンバマーの資格 葬祭関連企業などでつくる日本遺体衛生保全協会（JFSA）が認定する養成学校で、葬祭学や解剖学、病理学、修復学などの履修と実習を計2年間学び、同協会による認定試験に合格する必要がある。現在、国内に87人。日本での実施数は年々増え、2007年は1万6450件。年間死者数の1%台。遺体を運んで処置を行う専用施設は14都道府県に30か所ある。

「緑それぞれ 寄り添う人」へのご意見、ご感想をお寄せ下さい。手紙（〒530・8551 読売新聞大阪本社生活情報部「緑それぞれ」係）かファクス（06・6365・7521）、メール（selkatsu@yomiuri.com）をお願いします。